

- ・松陰 敬仰の気運醸成
- ・松陰 精神の継承普及
- ・松陰 教学の研究振興

○編集発行 財団法人松風会
〒753 山口市大手町2-18
山口県教育会館内 TEL 0839 221218



会報

松門



松陰像を入れた校訓碑

萩第一中学校長 都築 泰

本校創立四十周年並びに校舎改築記念事業の一環として、同事業推進協議会（会長樋屋文夫）から、松陰先生像の彫入された校訓碑を寄贈してもらった。

本校校区は、松陰先生の誕生地や、墓所・松陰神社・松下村塾などの先生ゆかりの史蹟を持ち、松陰教学発祥の地であると自認しながら、それを象徴する何かがほしいと願っていた矢先の寄贈で、心から有難く思うものである。早速に、本年四月十四日に除幕式を行い、「至誠」を基調にした校訓を日夜心に銘じ、読書や勤労に精をだす生徒の育成を期することに決意を新たにしたものである。

この校訓碑は、碑面がたて一〇〇cm、よこ二一〇cm、敷石ともで高さ一二〇cmある。石材は秋穂御影を用い、彫刻家田辺武氏の労作による。

表面には、「至誠」の校訓を右側に、松陰先生像は、長径七



校 訓 碑

ものを原型にした。したがって、右上りの書体や、戈の部分のねなどにその特徴がうかがわれ、校訓にふさわしい入魂になったものと思う。

また、この松陰先生像を中心に、文字の選定や、その配置、さらには、まわりのスチュエーションをも含めたレイアウトに関して、田辺氏の製作意欲は実に旺

〇cm、短径五五cmの楕円形のブロンズで左側に配した。「至誠」の文字は、至誠而不動者未之有也……のいわゆる「至誠の書」の親筆を松陰神社宮司の御好意により、写真にとって拡大した

の門下生が激賞しているとおり、松陰先生の気魄や行動力を具象化した青年松陰像であると考えたからである。多くの人になじまれている松浦松洞の描いた吉田松陰の肖像は熟年松陰であり、

学者松陰を象徴している感が強く、現在の中学生の心を引き付けるには断層があると思っただからである。

このような考え方は、新進彫刻家田辺武氏とも一致して、氏は京都大学を訪れ、特別の計らいによって、指定の写真家の撮影する原像を手にされた。

盛であり、完成までに七回も私のところに来られた。裏面には、松下村塾の聯から「自非讀萬卷書安得爲千秋人」「自非輕一己勞安得致兆民安」の二文を彫り入れた。これは、実物と大きさ、節の間隔、長さ、文字のすべてが同じに複製された聯が本校校長室にあり、この複製品をもとに、田辺氏が拓本をとって彫刻された。なお、この複製は、瀧原翁の彫刻によるもので、三代校長田中俊資先生の手による。

「万巻の書を読むにあらざるよりは、いづくぞ千秋の人たるをえん。」「一己の労を軽んずるにあらざるよりは、いづくぞ兆民の安きを致すをえん。」の二文は、読書の必要なことや勤労の重要なことを諭された松下村塾の塾生訓であった。松陰先生の歿後百三十年、幾度かの教育改革を経た今日、なお本校の校訓として生きていることを思うとき、不易の教育という実感を強くもつものである。

末尾に本校の記念事業推進協議会の名を記した。総工費二百万円は、今後の萩第一中学校教育に大きく生かされるものと思う。



襖の下張りとは吉田松陰

山口市 金 本 利 雄

一

今から三十数年前、私は山口に出て家業の表具屋を開業した。開業した当時の仕事は、主に襖の張り替えであった。戦災を受けていない山口の町の古びた家の襖は、長い年月にさらされていて修理に手間どった。湿気にふくらんだ襖の下張りを剥いで、中の組子を修理して張り上げることも度々であった。

剥ぎとった下張りには、いろいろのものが張ってある。大幅帳、漢籍類、謡本、手紙等、初めはそうしたものを風呂に焚いたりしていたのであるが、よく見れば、何やら達筆で書いたものもある。丸めて倉庫にはうりこんで置いた。

「松陰先生は、あの松下村塾の一角で、将来国家の干城となるべき子弟を教育した。松陰先生は偉大な教育者である。そして又、その子弟も松陰先生の教えをよく守り……お前達はそこを思ってやらんやいかん。」

く気にかかるので、宛名の「治心氣齋」というのを調べてみると、松陰の師であり後見人でもあった山田宇右衛門であることが分って、これはもしかしたら吉田松陰の手紙ではないかと思うようになった。

私は少年時代から、吉田松陰という人を敬遠する気持があった。私たちの少年から青年時代へかけて、それは支那事変からだんだん拡大し、遂に太平洋戦争にまで突入する過程の中で、皇国史観が説かれ、大和魂が鼓吹され、一億火の玉となって国難に当ることの必至が強調される中で、松陰は学校教育の指針であった。

「松陰先生は、あの松下村塾の一角で、将来国家の干城となるべき子弟を教育した。松陰先生は偉大な教育者である。そして又、その子弟も松陰先生の教えをよく守り……お前達はそこを思っ

顔の長い松陰と二重うつしに感じられてくるのであった。

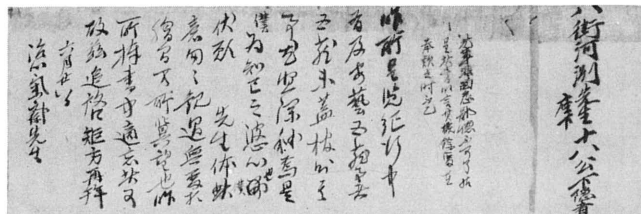
そんな少年時代のこともあって、私は吉田松陰については、つとめて読まないようにしていた。むしろ、そうしたものは反対のものに惹かれる何十年であった。随って十年位前の私の吉田松陰についての知識は、極めて貧弱であった。

しかし、それではいけない、吉田松陰を調べなければ、この書簡が果して松陰のものかどうか確証をつかむことは出来ないという思いから、にわか勉強の読書と解読を始めたのである。私の俄勉強の中から、ほぼ概略のことが分り始めた頃、親友の山本弘秋氏にこのことを話したことから、多くの歴史家、松陰研究者の方から、松陰の筆跡に相違ないという答えを戴いた。

当時のどの先生達も、そう言ったような訓話を真面目くさった語調で語り、その顔付までがあの老成ぶつた

全集復刻版が刊行されて、歴史家奈良本辰也先生の紹介によって、この書簡も掲載された。「矩方再拜」と署名のある松陰書簡の内容は、次の通りである。(写真参照・原漢文)

八街河洲先生座下
十八公下隠者
此の事面悉に非ずんば鄙懷了様すべからず、此の書を呈し以て其の概を言う、餘は留めて奉款の時にあり、不乙



下張りになっていた松陰の手紙

冒頭の八街河洲は山田宇右衛門のこと、十八公とは、松の字を分解すると十と八と公となることから松下隠者となる。私は数ある松陰資料によって、この書簡が嘉永五年八月二十八日、松陰二十二歳の時のものであることを知ることが出来た。

嘉永四年(この書簡の前年)松陰は藩主の参勤に随って江戸遊学をし、肥後の宮部鼎蔵と盛岡の人江幡五郎と東北旅行に出発する。江幡が兄の仇討ちをしたいというのに同調して、赤穂浪士の討入りの日にちなんで、十二月十五日を出発の日と決めた為に、松陰の過書手形が間に

合わず、脱藩して旅立ったことは「東北遊日記」に委しい。

その結果、松陰は萩に帰され謹慎させられるが、この謹慎中の六月二十八日、恩師山田宇右衛門にあてた手紙が前記の書簡である。又、文中の安芸五蔵とは江幡のことであるが、仇討ちのことは秘密にしておいて欲しいというのが文意である。

萩に帰された松陰にとって、最も大きな打撃は、宇右衛門からの義絶である。「足下の志確ならず、大ならず」と松陰を非難し絶交した宇右衛門の書簡が旧全集に収められている。

しかし、それから二年後の安政元年、松陰の下田踏海事件を宇右衛門は浦賀防禦参謀としてこれを知ることになる。

三

文久三年、藩主の山口移鎮に随って、宇右衛門も山口に移り後河原河畔に居をかまえたという。藩の中枢にあって東奔西走したのであったが、慶応三年五十五歳で病没する。墓は山口の街を見下す天神山中腹にある。

私の発見した松陰書簡のことが、テレビや新聞に報道された直後、九州に居られる山田家の

子孫といわれる老婦人が訪ねて来られたことがある。お話を聞くと、多分明治の前半に山田家は山口を引き払って他県に出られたということであった。

山田家が山口を去る時、山田家のものは処分されてしまったのであろうか。ともあれ、その一部が、その後の百年近くを陽の目を見ることなく、古襖の中に眠っていたということになる。



山田宇右衛門の墓

た徳富蘇峰以後、幾多の松陰研究書を見てもうなづけることである。時代と共に人の評価も変ることの一つの証左である。

しかし、松陰の没後、松陰の亜流たちによって歪曲された功罪も、又大きいと言わざるを得ない。

「講孟余話」で、「天下は天下の天下である」と言う山県大華に対して、「天下は一人の天下である」と

あろうか。

「もし松陰が明治まで生きていたら……」という仮説は、多くの人の胸の中にある、ひそかな思いである。或は別の維新が生れたのではないかと。

そう思わせるものの中に、松陰という人の、人を魅了して止まない何かがある。

私が一つの機縁によって、松陰の著述にまがりなりにもふれる気になったのは、何時の時代、何処の地でも変わらない、一つの道をひたむきに生きた一個の心の像を追ってみたかったことにある。完全な人格者、偉人としての松陰よりも、人間らしい松陰を求めたかったことにある。全十巻にわたる松陰全集の中から抜きとってくる、人間松陰の息吹きを伝えるものは数えきれない程多い。そして又、多くの学者や研究者達の指摘するところでもある。

五

絶交後の松陰と宇右衛門のことについては、わずかに二三の松陰草稿によるより外にすばはないが、安政三年、宇右衛門は松陰の兄梅太郎を介して、松陰の講孟割記(余話)を見たいと

言ってくる。松陰の喜ぶ様子が文面に漲っている。

……賤著講孟割記を見んことを求めらる。奮激何ぞ勝へん。僕少々にして門下に親炙し、片言隻辞未だ嘗て正を先生に取らざるはあらず……伏して願はくは、先生之れを視られよ。果して道を益するか、果して道を害するか、道を益せば是れ伝うべきなり、道を害せば是れ絶つべきなり……。

(丙辰幽室文稿)

松陰にとっての山田宇右衛門は生涯の師であり、又、ゆくてに立ちふさがりる巨大な山でもあった。その山に向って「益するか、害するか」と問いかける松陰は、あの最後の著である「留魂録」の中で、自分の生涯は「秕たる」と粟たるを我が知るところに非ず」と自得する心に通じるものがある。

松陰の著述が益か害か、その生涯が秕か粟であったか、それは松陰の知るところではないのかも知れない。

しかし、今も尚そのことの真意が問われ続けているのではあるまいか。

四

松陰が、百余年を過ぎても尚、人を惹きつけて止まない魅力とエネルギーを感じさせる人物であることは周知のことである。

あるときは愛国者松陰であり、革命者松陰であり、又求道者であり教育者松陰であったことは、最初に松陰を世に紹介し

本が歩まなければならなかった帝國主義国家への道でもあった。そして七十年後に惨憺たる太平洋戦にのめりこんでゆく……その中で松陰は、時代の寵児のように持てはやされたのも事実である。

しかし、明治政府が打ち立てた「一人の天下」の実態は、果して松陰の夢見た姿であったで

松陰の足跡をたずねて⑤

五条・八木・信濃

厚狭教育事務所
木島俊太郎

はじめに

今回の旅は、松陰先生の「癸丑遊歴日録」の中の大和地方における、森田節斎・谷三山たちとの出会いを探ることを主たる目的としている。

加えて、松陰先生に多大な影響を与えた佐久間象山の遺跡を訪ねることも含まれている。

参加者は、松風会理事の三輪稔夫・石川稔・山本博一の三先生と徳山松陰会の村田正樹先生と私の五人である。

行く先々での見聞もさることながら、旅を共にした四人の先生方から拝聴したお話しも得難い収穫であった。貴重な機会を与えていただいたことに對する謝意を表する意味で、あえて拙筆を執ることにした。

「癸丑遊歴日録」によると、

松陰は癸丑正月二六日(一八五三)萩を発して旅路につく。富海より海路、兵庫・明石を経て大阪に至る。ここより陸路大和に向かい、二月一三日、大和五

条で森田謙蔵(節斎)に、五月

二日、八木で谷三山に会う。その後、八木を発って津・桑名を経て舟で今尾・大垣に向かう。ここから陸路、中仙道に沿い、馬籠・福島・杓掛・高崎を経由して江戸に入る。江戸で交友を

温め、五月二五日、鎌倉の瑞泉寺に落ち着いたとある。

一〇月二八日(月)

予定どおり、午前六時三〇分小郡駅新幹線口に全員集合。六時五二分発、ひかり二〇号で、

快適な旅の第一歩を踏み出す。車中では早速、松陰先生の話しに花が咲き、たちまちの内に新大阪駅に着く。灘波・橋本を経由して五条市に至る。

五 条 市

松陰が森田節斎を尋ねて、度々足を運んだ所である。

五条市図書館において、文化財係長 新井貞子女史の御心配で、地元の郷土史家 阪部鐘司



五条市図書館における説明会

(八四歳)・松山昭夫(八二歳)両氏から、森田節斎並びに節斎と松陰のかかわりに付いての話を拝聴することが出来た。

更に、市内案内を受ける。旧邸が各所に点在し往時の面影を偲ぶ事が出来る。落ち着いた町で、代官が善政をしきみんなから親しまれたと言うことである。

森田節斎頌徳碑

五条市中央公民館のそばに頌徳碑が在り、一文に「文章を以て生徒を鼓舞す。生徒多くは慨世憂国章句を事とせず。吉田寅次郎・久坂玄瑞・原田亀太郎、其卓々たる者。」とある。二人が時事を痛論しついに師弟の契をなしたとあるほど互いに認め合う間柄であった。

森田文庵

(節斎の父)の墓所

貧乏人からは金を取らなかったと言う医者文庵にふさわしい地味な墓石である。向かいに、天誅

組鈴木源内の墓碑がある。また、同じ墓地内に、数柱の俳人の墓も在る。学問を尊んだ地域にふさわしい光景である。

天誅組本陣跡。桜井寺は大本寺である。門柱は昔のままだと言う。石段もまたしかり。当時の熱気が漂って来る感じがする。

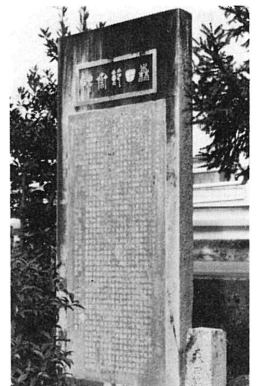
桜 井 寺

栗 山 家
慶長一二年建立。日本一古い民家。材はトガ・カヤ・モミ等で総て漆で磨かれている。大黒柱は一尺五寸のカヤ材で檜がんなで削られている。工法的にも貴重な建物である。

森田節斎旧宅

旧宅は既に人手に渡り、老女一人寂しく留守を守る。入るとすぐに二室が在り、今は居室となっているが、昔の勉強室である。書棚だけが昔のままだに残っている。

一枚板の年代を経た書棚の扉を何人が、どれほど開閉したことであろう。離れは寝所として使用していたと言ったことである。夜を徹しての激論も度々のことであつたらう。



森田節斎記念碑

提孝亭宅跡・下辻又七郎宅跡・乾十郎宅跡

いずれも現状は一新し、石碑だけがその証として建立されている。紀州街道を中心に散在するこれらの位置から、当時彼等が東に西に往来をし国家の行く末を論じあつたであろうと推察される。

三氏の心からのもてなしと「柿の葉寿司」を土産に五条から吉野に向かう。車窓に秋色を感じ、走り去る家並に土着の歴史を感じる。山が険しいので、列車は前後に移動して登る。夕刻、吉野に着く。旅館は岸壁に張り付くようにして建つ。壁面

に登り付く蔦の紅葉が目にし、
 全山の紅葉を想像させる。
 宿よし、酒よし、料理よし、
 話しは吉野の花より更によし。
 五条の人を誉め、節齋を論じて
 夜は更ける。

一〇月二九日(火)

早朝の山路を歩き、ケープル
 カーで下山。眼下の桜並木に混
 じり、楓・栂の古木は四季を通
 して見るに値する。

檀原神宮前を通過して大和八
 木に至る。

谷孫兵衛宅

奥行き六〇メートル 建坪六
 〇〇坪という大邸宅、油屋・肥
 料屋を経て現在に至る。突然の
 訪問にもかかわらず、若奥様の
 丁寧なもてなしを受ける。



額 扁 の 室 在 相

「相在室」という額の掲げら
 れた、谷三山先生の居室に案内
 される。床の間に三山先生の座
 像が安置されている。

松陰は節齋の紹介を受け三山
 を尋ね、筆談で問答をしている。

松陰が三山から受けた影響は大
 きい。松陰自らそのことを人に
 漏らしているし、また、多くの
 門人たちにも三山に会うことを
 勧めている。



前 宅 衛 兵 孫 谷

谷三山先生の頌徳碑は、檀原
 市公民館境内に在る。墓碑は小
 学校のそばの墓地に在る。興譲
 館塾は、肥料の倉庫場に在った
 が、現在は剣道場として使用さ
 れている。

京都を經由し、名古屋で昼食
 をとり、松本に向かう。

木曽川を上る。進むにつれ秋
 色深まる。眼下の河床は奇岩相
 連なり、景観は極めて趣がある。
 木曽は木材の地。全山、杉・檜
 に覆われていると思ったが、雑
 木が多く美しい紅葉を見せてい
 る。植・くぬぎの黄橙色に、け
 やき・漆の深紅色を加えた色合
 はさわやかである。いずれも樹
 形柔らかくもこと曲線を描
 いている。杉・檜の常緑樹に混
 ざり落葉松の配色は格別である。
 樹形は鋭角で雑木林帯と異なる
 味わいをもっている。

木曽路を登りつめれば、山は
 いよいよ高く、錦織りなす彩り
 は一つとして同じでない。深緑
 の植林帯も図柄として山に溶け
 込み、改めて大自然の偉大さを
 思い知らされる。

塩尻に至り眼前たちまち開
 け、連山遠くに霞む。左右に限
 りなく広がるぶどう・長芋畑を

眺めながら浅間に向かう。

一〇月三〇日(水)

浅間温泉を後に、路傍の道祖
 神を拝しながら安曇野に入る。

碌山(荻原守衛) 美術館

赤レンガに蔦の絡まる洋風の
 美術館が、周囲によく溶
 け込んでいいる。ロダンに
 師事した我が国近代彫刻
 の開拓者の力作にしばし
 見とれる。

その内、山本博一先生
 が大発見をされる。日記
 の展示の中に、吉田松陰
 の名が見られるという。一同沸
 き立つ。

同六月二八日
 吉田松陰文に、死を見る。
 帰るがごとき信仰を見る。先生
 の人生観や一種の靈魂不滅説を
 取るる全き短命は永世其感化を
 のこし、最も長生の命なりと、
 観世経の講義亦実に感服。父兄
 へ送れる謝罪と述懐、読下おぼ
 え催涙。

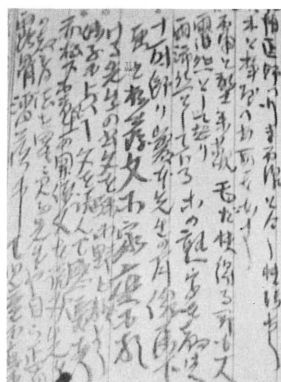
吉田松陰文「踏海、当時の
 有様眼前在熱血之士捧身至国事
 あふれては亡命となり踏海とな
 り、村塾教育となり。要撃の計
 に至りてついに刑に倒る。この
 間の文読者をして涙を惜まざら
 しむ。」



館 術 美 山 碌

(日記の抜粋)

明治三二年六月二七日



「なべのつま」日記

下記にかかげた書は、故揖取素彦男爵夫人寿様（吉田松陰先生の妹）が、お子様たちのために書かれた「嫁に対する心得書」で、その内容は育児心得である。

この手紙形式の育児心得書は、玖珂郡周東町川越毛明にお住まいの元周東町長・綿貫舒之氏夫人基世様

（寿様の曾孫で、揖取家から綿貫家に嫁がれた）が、今も所持されているものである。

松陰先生が、妹千代様宛におくられた『千代への書簡』（山口県教育会編・吉田松陰全集第七巻）にみられるものと類似面が多くある。千代様、寿様、文様ご姉

妹は、杉家の立派な家風に育てられ、また兄松陰先生の教えに学ばれて、家庭教育にも深い見識をもたれていたことが、この心得書からも偲ばれる。

人間が人間として行うべき道が失われている今の世相への警告として、この手紙形式の育児心得を書き写してみる。

綿貫家に伝わる

嫁に対する心得書

徳山松陰会

瀬 島 肇

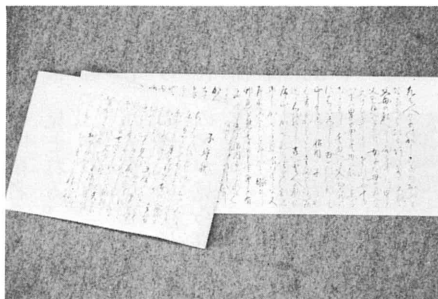
凡そ人の子のかしこきも、

おろかなるも、よしもあしきも、大概は父母の教へに寄ることなり。男子は父の教へを受け、女子は母の教へを受けること多し。されども、十歳以下は、男子女子共母の教へを受けること多し。それゆへに、父はおご

そかに母はしたし。母の行ひ別して正しくして、胎内に子の宿れば、常にかわりて食べ物、起居迄に心をつくし、いにしへ聖人の教へにも、「席正しからざれば座せず。割め正しからざれば喰はず」とか。又「耳に淫声を聞かず。目に邪色を見ず」とか申すことも有りとかや聞く。いまだ胎内に宿れる見聞もせぬ者故、母の行ひに関するもの故に、いかに小児とても生れ出で、目も見へ、耳も聞こへ、口も物を言うにいたりては、などか感ぜざるべけんや。

教へと申しても、六歳以下のこと故、言語にて諭すべきにもあらねば、兎に角母の心正しく、身の行ひ正しくしてかりそめにも埒もなきことを話し聞かせ、子を慰めむよりも、一つにても正しきよき話など。夜な夜な子を寝せる時も、或は忠臣孝子の咄、古へより名高き人、英雄の名など教へ、その人の詩歌など覚へ置きて教へ、子守歌にも、役にも立たぬ世間のうたなど聞かせぬ。守りする下女にも、正しき言葉遣ひなど、よく教へ置き萬事心を用ひ、餘り愛に過ぐると、子のまめやかならぬのみか、自づから子の心ばへも、た弱く成りて能き人と成り難し。又賤しく育つると子の心も賤しくなる故、かかる時節になりても子供の子育ては古へ武士の真心にておごりにならぬ様にして、廉恥の心教ゆること第一なり。

今の子供は多くは廉恥の心なき故、辻に買喰ひすること



嫁に対する心得書

杯、何とも思ひ不申。是皆親の教への届かぬ故也。口すさみの子守歌、子心にしるしおきぬ。老のくりごと申し残し候。あなかしこ

子守歌

父母の御恩の深きお恵みを。寝てもさめても忘れるなよ。

先ず朝起きて身を清め、本の

父母様みつ、親の仰せにそむきなく、手習学文精出して、夫婦は仲よく睦まじく、兄を敬ひ、弟をあわれむ心深ければ、友に交わりまことあり。その身その身に引受けし、家の勤めにおこたるな、世のよしあしを振捨てて、われさへ勤め行くならば、天の冥加にかなひつつ、子孫も栄へ行くことわりを、幼な心にわきまへて、生立ち給へおこたちよ。

ねんねこ ねんねこ ねんねこ

この心得書は、わが国の幕末から明治にかけての時代に、良識ある母親の心であった。しかし、今の若い人々は、封建時代のことで今の世に合わないと思定されるであらう。

戦後四十年、欧米の風潮、教育が積極的に取り入れられ、祖国の伝統も文化も、はたまた日本人の生き方を教える歴史も、学校教育の場で教えることを否定してしまった。その結果だけとは思われないが、規範性と倫理性を失った根無し草の如き若者の姿は、一つの悲劇である。

今、学校教育の見直しはもちろんであるが、家庭教育の見直しは急務であると思う。

ここにかかげた「嫁に対する心得書」は、綿貫家に嫁がれた基世夫人が、今もなお保管され、我が娘の嫁がれる日に語り伝えられたものであらう。それは、わが子の立派な成長を念じられる母心である。日本人の鑑となる先人の生き方を伝えることこそ、本当の歴史であり、教育の根源ではなからうか。

（住所 徳山市横浜町14-11）

玉木文之進は吉田松陰の父杉百合之助の末弟であり、松陰の叔父である。松陰の尊皇思想、愛国心は父によって培われ、教學の姿勢はこの文之進によって形成された。

文之進は幼名を正一、後正韞と言った。文之進は通称である。杉家から出て玉木十右衛門の後を嗣いだ。玉木家は大組に属し中士上等の家柄であった。

天保六年松陰は山鹿流兵学者範吉田家の第八代当主となった。

この時松陰の教育について最も重責を感じたのは文之進であった。文之進は極めて厳格、勤儉剛直の人であった。まだ童子の域を脱しきらない松陰に対して、徹底したスパルタ教育を施した。しかし、天賦の資質をもち、自己に荷せられた使命をかすかに感じとっていた松陰は、この厳しい試練に耐えぬいた。松陰が十一歳の時藩主敬親の御前で「武教全書」戦法編を講じたが、その見事な出来ばえに藩主は感心しその師をたずねた。側近の士が「玉木文之進」と答えた。この一事を見ても文之進が松陰の教育に打ち込んだ情熱を汲みとることができる。

文之進は経史、詩文をよくし、

又軍学にも長じ、松陰が幼少にして明倫館教授になった時もその後見役をつとめた。その後、藩学の都講に推挙され、又異船防禦手当掛りとなり浦賀に駐屯したこともあった。

松陰によってその名を知られた松下村塾は、天保十三年（松陰十三歳）文之進によって開かれた塾である。

文之進は近隣の徒を集め、主として国史、家乗（毛利家の歴史）、国体学等を教授した。しかし文之進の本

命は学者や教師ではなく民政であった。数郡の宰判に勤め多大の功績をあげ、後、郡奉行に累進し藩政の要職についた。

文之進が小郡代官から吉田代官に転じた時（安政四年）の業績を松陰は「吉日録」に詳述している。

文之進は先ず貧民のリストを作り庄屋と共に戸別訪問をし、その実情を把握して戸別指導を

松陰をめぐる人びと (4)

玉木文之進 石川 稔

した。四郎原では二村の水利争議がもとで渡船が途絶えていたが、関係者を集めて話し合いその解決を図った。その他神官僧侶の不仲を仲裁する等、従来なおざりになっていた諸問題を次々に解決した。

松陰はこの日記の中で文之進について次のように結んでいる。「持論老成にて、絶えて高奇成しがたきことを成さず。事

の自ら成るを待ちて、徐ろに是を成すを尚ぶ。尤も功名家を嫌ひ、世人と安りに交通をなさず。郡吏の貪流を深く惡み給へども唯だ自ら清廉を守り……勸農の一事に至りては、満腔の赤誠全

く茲に注す。且つ家に在る時は日々鋤犁（すき、くわ）を親するを以て農事尤も精しく、其の是れを訓ふること更に親切を覚ゆ。」

文之進は厳格一辺倒の人であったわけではなく、又温情の人でもあった。安政五年松陰が処刑された直後、哀悼の情を禁じ得ず、

「寅二郎は他国遊学以前、これという定った師がなかったのど偏に私がその教育に当りました。今大罪を犯してこのような仕儀と相成りましたのは、全く

事務局通信

遅れ遅れの通信であったが、今回でやっと追いついた。

本年度の主な事業（予定）

- ・会報第五号・第六号発行
- ・吉田松陰研究講座の開設
- ・松陰教学研究会の開催
- ・松陰先生の足跡をたずねる旅
- ・吉田松陰輪読会
- ・研究団体への助成（和木・防府に研究会が新たに生れた）
- ・松陰先生関係図書購入等は昨年に準じて行う。

本年特筆すべきことは、七月に松陰教学シリーズⅡ「吉田松陰の甦る道（上）」を刊行したことである。県下各小・中・高校・大学を始め、国会議員・県議・県庁・県教育庁・市町村長・同教育長・主要公民館・図書館・報道関係等に贈呈した。

内容は、「吉田松陰の学問と教育」三輪稔夫先生、「吉田松陰の孝道」石川稔先生、「顔録」拝読 上田孝治先生、「吉田松陰と村田清風」平川喜敬先生にご執筆いただいた。希望者には一冊五百円で頒布しているので松風会事務局までご連絡いただきたい。（谷口）

資料展示室

吉田松陰先生関係図書

(つづき)

・松陰先生手簡 二
・興風集 松下村塾蔵版
・涙松集

・少年吉田松陰伝 松本浩記
・大道館書店 昭6
・偉人叢書10吉田松陰 石川謙

・武田勘治
・三教書院
・昭15

・青年教師吉
・田松陰 上
・田庄三郎

・啓文社昭16
・吉田松陰先
・生関係研究

・資料―雑誌
・抜粹 五部
・明治維新百

・周年記念維
・新の原動力
・山口県公論

・社 昭40
・幻の殺意追
・跡 村岡 繁

・白鳥庵史荘
・天に羽ばたけ 村岡 繁 白
・鳥庵史荘 昭51

・吉田松陰先生御遺稿集 秋山
・四郎 松陰遺墨展示館 昭53
・吉田松陰の周辺 受業生の書

簡 山下秀範 人物往来社

昭56

・吉田松陰の教育像 吉村忠幸
・札幌女子短期大学「研究紀要」
・抜刷の合冊

・Western Views of the
・Japanese 谷川 潔
・塚田 直樹編注 桐原書店

・昭62
・幕末維新関係図書
・防長維新志士先賢略伝

・玉温先生詩存 惜春山荘
・郷土の先覚村田清風翁
・東行遺稿上下 田中光顕撰

・明19
・防長歴史談 宮崎 勇熊 明26
・追憶録付入江子遠遺稿 野村

・靖 明26
・防長史談 大藤 紘 明30
・近代人物側面観 新美益知編

・明41
・中学世界忠烈乃木大将 博文
・館 大元

・乃木將軍伝 杉原 幸 帝国
・図書普及会 大2
・政治家としての桂公 徳富猪

・一郎 民友社 大2
・精神鍛錬資料乃木軍戦影 吉
・野有武 大3

・乃木院長記念録 学習院輔仁
・会編 三光堂 大3
・高杉晋作全 横山達三 武狭

世界社 大5



本 松 戸 関

・村田清風 山口県教育会昭8

・春歌山博
・文寺写真
・帖春歌山

・博文寺
・昭9
・防長精神

・読本 厨
・川 肇他
・二人 白

・銀日新堂
・昭10
・長井雅楽周旋に関する世論に

・就いて 杉 敏介講演 温知
・会 昭11

・松菊書屋鈔 宮内里風 古屋
・醉紅 昭11

・高杉晋作小伝 香川政一 東
・行会 昭11

・富永有隣先生小伝 玉木俊雄
・編 富永有隣先生事蹟顕彰会

・昭11
・伊藤博文伝上中下 春畝公追
・頌会 昭15

・勤皇僧 月性伝 吉富治一
・山田忍三 昭17

・踏海志士 金子重之助 福本

・椿水 金子敏輔 昭33
・幕末の長州 田中 彰 中央
・公論社 昭40

・維新への歩み 山口県立山口
・博物館 昭41

・伝記 谷 三山 堀井義治
・記念事業推進会 昭41

・大和選書10 変革期の青年像
・高杉晋作と久坂玄瑞 池田
・論 大和書房 昭42

・萩の乱と前原一誠 富成 博
・三一書房 昭44

・木戸孝允 大江志乃夫 中央
・公論社 昭46 (谷口)

・(編集後記)
・「たった四字の「矩方再拜」の
・文字が手がかりとなって、松陰

・の新しい資料が発見された。金
・本さん自身の松陰観も変わった。
・すばらしいことです。

・瀬島先生の玉稿も同じような
・意味で大変貴重だと思います。
・萩一中の校訓碑は機会があつ

・たらぜひ見て下さい。そして都
・築校長の悲願を感じ取って下さ
・い。
・雑誌は三号新聞は五号と言いま
・す。「松門」も五号となりまし
・た。マンネリ化しないために
・諸兄弟のご意見ご感想ご投稿を
・お待ちしております。(石川)